

# 文字の解読

—遼・西夏・金・元の創製文字—

佐藤久美：文学部の学生。歴史一般に関心がある。

山村健一：情報科学部の学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授：漢文の先生。いろいろな文字に関心がある。

第1回 文字の解読

第2回 未解読文字のタイプ（1）

第3回 未解読文字のタイプ（2）

第4回 漢字と漢字周辺文字

## 第1回《文字の解読》

\*\*\*安井の研究室で古代文字の資料展を行っている\*\*\*



佐藤久美：「解読」というと、暗号解読、パスワード解読、文字化け解読など、いろいろな解読があります。「文字の解読」というのはどういうことでしょうか？

安井教授：文字の解読というのは、もちろん「文字で書かれた言葉」の意味を読み解くということです。

佐藤久美：そうしますと、私はロシア語もロシア文字も知らないのですが、辞書を片手にロシア語の文書を読み解いていく場合、解読と言ってもいいのでしょうか？

安井教授：それは「解読」とはいいません。英文読解などというときの「読解」とか「解釈」などと言ったほうがいいでしょう。

ホープという人が『古代文字解読の物語』（モーリス・W・M・ホープ著、唐須教光訳。新潮社、1982年発行）という本の前文でこんなことを言っています。「解読とは門を開くことであり、解釈とはその向こうにある広がりに関わることなのである」と。「門を開く」とはなかなか言い得て妙です。

辞書を使い、ときに文法書をひもとき、「一定の手続き」に沿って進む。そうすれば、おのずと文の理解も進む。これは読解とか解釈ですね。それに対して、文を理解するための「手続き」そのものを発見しながら読み解いていく。これが解読です。

佐藤久美：具体的にはどういうことでしょうか？

安井教授：そこの本棚にロシア語の本があります。山村君、すみませんがとってください。

こんな文があります。

—Здравствуй, Пётр Иванович, мой дорогой друг! Как ты изменился! Волосы у тебя седые и редкие, ты потолстел . . .  
—Простите, но меня зовут не Пётр Иванович, а Фёдор Николаевич.  
—Как? Ты изменил даже имя?!

「やあ、今日は、ピョートル・イワーノヴィッチ君！ 君はずいぶんかわったねえ！ 髪の毛は白いし、薄いし、君は太ったなあ . . .」

「失礼ですが、私の名前はピョートル・イワーノヴィッチではなくて、フォードル・ニコラーエヴィッチと申しますが」

「おや？ 君は名前まで変えたのかい?!」

(『ロシア語の入門』白水社、小沢政雄著より)

どうでしょうか。ロシア文字で書かれたロシア語の文章、それと内容が対応した日本語の文章です。佐藤さんはロシア文字もロシア語もまったく知らないそうですから、佐藤さんにとっては未知の文字と言語ということです。参照するものといえば、日本語の文章以外にありません。これからどうやってロシア語の文章を読み解いていったらいいのでしょうか。

佐藤久美：この文の意味は日本語でわかっています。これを読み解いても新しいことがわかる、ということではないとおもうのですが？

安井教授：たしかに意味内容の上では新しい情報は期待できません。しかし言葉の構造を明らかにすることによって、どのような系統の言葉であるかということがわかります。そうしますと、この資料がどのようなものかという位置づけができます。これが一つ目の効用です。二つ目の効用は、解説から得た情報を、この文字で書かれた他の資料に応用することによって新たな情報を得ることができるということです。

山村健一：上の文章が未知の文字資料だとすると、先ず文字がどういった性質の文字なのか見当をつける必要がありますね。表音文字とか表意文字とか・・・。

安井教授：そうですね。ローマ字のような表音文字（表単音文字）ならば、数十種類の文字で用を足せます。同じ表音文字でも、日本語の平仮名やカタカナのように子音と母音を一文字で表わす文字（表音節文字）ならばもう少し多目に文字の種類が必要になります。漢字のような表意文字ならば数千種の文字が必要となるでしょう。日本語のような漢字と仮名が混じった文ならば、文字数はやや少な目になります。ですから、文字数は1から4の順に増えていくことになりますね。

- 1.表単音文字（ローマ字など）・・・・・・数十種類
- 2.表音節文字（仮名など）・・・・・・数十種類～数百種類
- 3.表音文字＋表意文字（漢字仮名混じり文など）・・数百種類～数千種類
- 4.表意文字（漢字など）・・・・・・数千種類

上の文の場合はどうでしょうか？ まず文字の累計数と種類を数える必要がありますね。厳密に言えば、どこまでを文字の一単位とするかという問題がありますから、文字数を数えるといっても簡単なことではありません。しかし、未解説文字の場合それが分からないのが建前です。ですから、とりあえずは直感に頼って要素の数をかぞえてみましょう。手分けしてやってみてください。

・・・・・・作 業・・・・・・

山村健一：ロシア語のほうは、文字の累計が160で種類は28です。

佐藤久美：日本語のほうは、文字の累計が121で種類は61です。漢字仮名混じり文で使われている文字の種類はロシア語の倍以上ですね。

安井教授：ロシア語のほうは、累計数が多いにもかかわらず、文字の種類は少ないことがわかりますね。同じ文字が繰り返し使用されているわけです。これより、表音文字とみてよいのでしょうか。

佐藤さん、いかがでしょうか。表音文字という前提で、これを「解説」してみてください。

佐藤久美：そうですね・・・、ひとかたまりの文字が単語に相当するというのは予想できるのですが、それからどうしたらいいものか・・・。

安井教授：文字の第一の使命は単語を示すことにあります。ですから、佐藤さんのように単語の区切りを見つけることは大事です。もっとも単語の表わし方はいろいろです。ロシア語や英語は空白を設けて単語の切れ目を表わします。日本語は仮名と漢字を混用しその字形の違いにより単語の切れ目を表わします。単語の切れ目が形式の上にもまったく現われない場合もあります。いろいろですが、単語のまとまりが表現されているかどうか、表現されているとしたならばどの様なものか、というところに目をつけることは解読にとって欠かせません。

問題は、これからどうするかですね。あらかじめ作られた海図はありません。それぞれの資料の状況に即して様々な手順を編み出し、鉄の扉をこじ開けるようにして読み解いていくしかありません。このように、手順そのものを見つけ出しながら読み解くことを「解読」といいます。

山村健一：この文ですが、日本語を見ますと、人名「ピョートル・イワーノヴィッチ」が2回現れます。主語に当たる「君は」は3回現れます。未知の文にも同じ語が同じ回数現れるのではないのでしょうか。

佐藤久美：それなら、

—Здравствуй, Пётр Иванович, мой дорогой друг! Как ты изменился! Волосы у тебя седые и редкие, ты потолстел・・・  
—Простите, но меня зовут не Пётр Иванович, а Фёдор Николаевич.  
—Как? Ты изменил даже имя?!

Пётр Иванович (2回) = ピョートル・イワーノヴィッチ (2回)  
ты (3回) = 君は (3回)

ということかしら？

山村健一：もう一つ「フョードル・ニコラーエヴィッチ」という人名がある。「ピョートル・イワーノヴィッチ」と比べると、「.....ル.....ヴィッチ」の部分が共通するから、「..... р.....вич」とある部分が「フョードル・ニコラーエヴィッチ」に相当するはずだ。

固有名詞の「ピョートル・イワーノヴィッチ」と「フョードル・ニコラーエヴィッチ」は発音を表わしているから、対応する「Пётр Иванович」と「Фёдор Николаевич」の発音もそれに近いもので、共通部分は同じ発音のはずだから、ёは「ヨー」、рは「ル」、вичは「ヴィッチ」ということになる。

П ё т р И в а н о в и ч  
Ф ё д о р Н и к о л а е в и ч

佐藤久美：これで上の「未解読文字」の単語の意味と、文字の音の一部がわかった、ということね。

安井教授：なかなかおもしろいですね。

未知の文字資料が表音文字の場合、何らかの手順で一部の文字の音を推定できれば、それを応用して次々と他の単語の音形を知ることができます。単語の音形がわかれば、その資料を取り巻く近隣の言葉、それは現在のものでも過去のものでもいいのですが、その音形と比較することによって未知の単語の意味と用法を推定することができます。運が良ければ解読は急速に進むことでしょう。

もしも未知の文字資料が漢字のような表意文字であるならば、数千に渡る一字一字について音と意味を個別に解明しなければなりません。ですから、よほど条件がよくないと解読は難しいものとなります。

表音文字と表意文字の混合の場合、両者の見極めという別の問題がでてきます。

それから用語についてですが、「未解読文字」という場合、その文字を使う人たちが、古代人でも現代人でもいいのですが、その時点で死に絶えてしまっていて文字と言葉の関係を伝承する人が一人もいない、ということが前提になっています。ほとんどの人は分からないのだけれども誰かに聞けばすぐに分かる、というのは未解読文字とは言いません。ロシア文の場合、ロシア語の先生に聞けばすぐに分かりますからもちろん未解読文字とはいいません。

佐藤久美：よくわかりました。ところで、これはエジプトの象形文字だとおもうのですが、未解読文字ではありませんね？



パピルス断片

安井教授：この文字はフランス人のジャン=フランソワ・シャンポリオンによって解読され、『象形文字体系要約』（1824年）という本にまとめられています。

このパピルスの断片を見てすぐにわかるように、文字は具体的な事物をかたどった象形文字です。ですから最初は、漢字のように意味を表わすと考えたようです。もっとも名前の部分については象形文字を表音的に用いていることが知られていました。エジプト象形文字の場合、王様などの名前の部分は「カルトウーシュ」（仏語 *cartouche* 銘や紋章を囲む渦巻様の装飾）と呼ばれる楕円の線で囲まれているので、それとすぐにわかります。



石板断片

アメンヘテプ三世のカルトウーシュ

佐藤久美：先ほど、内容が対応したロシア語と日本語の文章を検討しました。それで、解読を進めるばあい内容が対応した資料はずいぶん便利だということがわかりました。エジプト象形文字の場合、こういった資料は無いのでしょうか？

安井教授：この文字の解読に威力を発揮したのは、やはり二つの言葉が対応した資料でした。

フランスのナポレオンの遠征軍が、1799年にエジプトのロゼッタから碑文を発見しました。エジプト象形文字と民衆文字（草書体のようなもの）で書かれたエジプト語と、ギリシア文字で書かれたギリシア語が刻まれていたことは有名ですね。後に「ロゼッタ石」と呼ばれ、古代文字解読の象徴のようになっています。ギリシア語文の中に幾つかの人名があり、それがカルトウーシュと呼ばれる楕円の線でかこまれたエジプト象形文字に対応しています。ちょうど、先にみた「Пётр Иванович」と「ピョートル・イワーノヴィッチ」のようなものです。シャンポリオンはエジプト象形文字とギリシア文字の人名をうまく対応させ、その音を決定し、次々に他の語に応用し、文字

の音を解明していきました。人名や地名などの音を表わす語や外国の文物などを音写した語は、解読の突破口となる場合が多いですね。

もつとも、シャンポリオンの最大の功績は、人名などの音を表わす語以外の文字の性格を正しく認識して解読を進めたところにあります。それまで、人名以外の部分は、一般には表意的な象形文字と考えられていたのですが、シャンポリオンは表音の象形文字が主体で、表意文字も混じっていると考えて作業を進めました。この出発の前提が良かったわけですね。

どうしてこのような考えから出発することができたのか、ということを知りたいですね。みなさんどのように考えますか？

山村健一：先ほどロシア語と日本語の対応資料を検討しました。その時に、それぞれの文字数を数え、文字の性格を予想してから始めました。同じようなことをしたのではないのでしょうか。

安井教授：そのとおりです。シャンポリオンも文字数を数えてみたのです。ロゼッタ石のギリシア語の部分は 500 に足りない数の語を含んでいました。もしも、対応するエジプト象形文字の一つ一つが表意文字であるならば、500 くらいの文字数で用が足りるわけです。しかし、実際には 1,419 の記号が使われていました。もしも表意文字であるとしたならば多すぎます。さらに 1,419 という数は記号の累計であって、わずか 66 の要素が繰り返し使われていることがわかったのです。これが、表音の象形文字が主体となっていると考えた主な根拠です。このあたりのことは先に紹介した『古代文字解読の物語』に書いてあります。これはなかなかおもしろい本です。目を通しておくといいでしょう。

エジプト象形文字の場合、現在では文法書も辞書もありますので、私たちも読解に挑戦することができるようになっていきます。もちろんこれは「解読」ではありません。

.....

佐藤久美：こちらは中国関係の資料のようですが漢字とは違うようですね？



安井教授：契丹文字の貨幣です。10 世紀から 12 世紀にかけて中国の北部に契丹人が国

を建てました。中国の王朝の一つに数えて遼といいます。これはその遼の契丹人が作った文字で、契丹文字といいます。

佐藤久美：今日の展示は「古代文字資料展」ということですが、10世紀から12世紀の文字資料を古代文字と呼んでいいのでしょうか？

安井教授：ここで言う「古代」は歴史区分などで使われる古代ではありません。昔の文字というくらいの意味で使っていますので、そのように考えてください。

佐藤久美：10世紀頃の文字でしたら解読されているのでしょうかね。

安井教授：ところが、これは未解読といってもいいような文字です。まだ一部分しか解読されていません。

佐藤久美：東アジアに古代の未解読文字があるなんてロマンですね。詳しくお話をうかがいたいのですが。

安井教授：もし皆さんさえよかったら勉強会をやりますが、いかがでしょうか？

山村・佐藤：お願いします。

安井教授：それでは来週金曜日この時間に研究室に集まってください。

それから、この方面の概説と研究を兼ねた本として中公文庫の『アジア古代文字の解読』（西田龍雄著。中央公論新社、2002年発行）があります。目を通しておいてください。

**\*\*\*\*\*次回は次のページより\*\*\*\*\***



## 《第2回 未解読文字のタイプ（1）》

安井教授：先週の古代文字資料展はどうでしたか？

山村健一：いろんな古代文字を見ることができて良かったのですが、時代とか地域とか文字の系統とか、何かテーマを絞った方がわかりやすかったのではないのでしょうか。

安井教授：古代エジプトの象形文字から東アジアのパスパ文字まで並べましたから、わけが分からなかったかも知れませんね。

ところで、皆さんは東アジアの契丹文字について知りたいということでしたね。これは10世紀に新たに作られた文字ですから「創製文字」と言ったところでしょうか。10世紀以降しばらくの間、この地域から次々と創製文字が現れました。古代文字を勉強する者にとって、なかなかおもしろい時代です。

山村健一：10世紀から13世紀にかけて、東アジアで次々と新しい文字が作られたというのは高校の教科書で習ったような気がします。どういったものだったのでしょうか？

安井教授：佐藤さんはたしか歴史が好きだと言っていましたね。このあたりはどうでしょうか？

佐藤久美：はい。10世紀に遼（916～1125年）という国で契丹文字、11世紀に西夏（1038～1227年）という国で西夏文字、12世紀には金（1115～1234年）という国で女真文字が作られました。



12世紀初めの状況を示した地図。『中国歴史地図集 第六冊』（譚其驤主編。上海：地図出版社、1982年発行）により作成した模式図

それから 13 世紀、元（1271～1368 年）のフビライ汗の時代にはパスパ文字が作られました。これは有名ですね。



山村健一：それぞれの文字は解読されているのでしょうか？

安井教授：文字の解読への道のりには三つの段階があります。契丹文字、西夏文字、女真文字、パスパ文字は、一と二の段階は過ぎて、第三の段階にあるのですが、その状況はさまざまです。

- 一、 先ず、資料が学会に紹介され文字への関心が喚起された段階。この段階では、その文字が正しく認識されていない。
- 二、 次に、その文字が正しく認識され、資料の位置づけがなされる段階。
- 三、 最後に、その文字の音と意味および構造が明らかにされる段階。

佐藤久美：前回紹介していただいた『アジア古代文字の解読』という本によりますと、文字の解読において、四つの基本的な型をたてています。この四つの型は、それぞれの文字の状況を説明するのに有用ではないでしょうか。

- A型：既知の文字で既知の言葉が書かれているもの
- B型：未知の文字で既知の言葉が書かれているもの
- C型：既知の文字で未知の言葉が書かれているもの
- D型：未知の文字で未知の言葉が書かれているもの

山村健一：DとCとBの資料を読み解くのが「解読」で、Aの資料を読み解くのが「読解」とか「解釈」ですね。

そうしますと契丹文字はA B C Dのどの型に当たるのでしょうか？

### 〈契丹文字〉

安井教授：実は契丹文字には二種類ありました。契丹大字と契丹小字です。左は大字が鑄込まれた貨幣で、右は拓本ですが小字が鑄込まれた貨幣です。



大字



小字

『中国民族古文字図録』（中国社会科学出版社、1990年発行）による

佐藤久美：大字も小字も漢字に似ていますが、小字のほうは筆画が多く何か不思議な雰囲気ですね。

安井教授：大字は漢字に似せて作った文字で、ふつうには表意文字であるとされています。このような表意文字は一字一字につき、その音と意味を解明して行かなければならないので余程条件が良くないと全面的な解読は難しいでしょう。まだほんの一部しか解読されていません。小字のほうは表音文字ですが、表意文字も混じっているようです。

佐藤久美：貨幣以外にはどのような資料があるのでしょうか？

安井教授：大字と小字の主な資料は碑文です。内容が対応した漢字中国語の資料がありまして、それを利用して解読が行われています。大字と小字を比べると、小字の方が解読は進んでいます。小字で書かれた碑文の中に、中国語の人名や官職名などの音を、そのまま小字で記した部分があります。先にみた「Петр Иванович」と「ピョートル・イワーノヴィッチ」のようなものですね。こうした部分が相当数あります。これによって小字の音はだいぶわかっています。

これらの文字は当初、D型（未知の文字で未知の言葉が書かれているもの）であったのですが、研究が進み、現在では言葉はアルタイ系の言葉で、しかもモンゴル語の一方言ではないかとされています。

山村健一：そうしますと契丹文字はB型（未知の文字で既知の言葉が書かれているもの）ですね？

安井教授：B型と言い切ることもできません。契丹語を記した部分の解説が難しいようです。既に滅んでしまった契丹語を構築しながら解説を進めていくということなのでしょうね。

大字については文字の性質からみて一字一字進めるしかありません。大字の字典のような資料が新たに見つからない限り根気よくやるしかありませんね。小字の場合、中国語と対照できる部分の研究はある程度進んでいるのですが、契丹語の部分が難しいようです。

佐藤久美：少し話が戻るのですが、さきほど先生がおっしゃった「アルタイ系の言葉」とはどういうことでしょうか？

安井教授：現在の中国の北側から、黒海と地中海にはさまれたトルコに至る広大な地域において、三つの主要な言葉が話されています。右からツングース語、モンゴル語、トルコ諸語です。これらは似通った言葉の特徴を持っています。まとめてアルタイ諸語と呼んだり、アルタイ系の言葉などと呼んだりします。

遼・西夏・金・元の言葉のうち、遼・金・元がアルタイ系の言葉で、西夏がチベット系の言葉ということになります。



Fang kuei Li(李方桂)1937 'Language and Dialects of China'  
の記述により作成した模式図

それから、遼・西夏・金・元の創製文字の歴史背景を知っておくことは大事です。『中国の歴史 08 疾駆する草原の征服者 遼西夏金元』（杉山正明著。講談社、2005年発行）があります。目を通しておいてください。

今日はこのくらいにしておきましょう。

**\*\*\*\*\*次回は次のページより\*\*\*\*\***

### 《第3回 未解読文字のタイプ（2）》

#### 〈西夏文字〉

安井教授：これは西夏文字が鑄込まれた西夏国の銅貨です。



佐藤久美：漢字とは雰囲気違いますね。どちらかというとな契丹小字に似ているような印象をうけますが表音文字なのでしょうか？

それから、西夏文字のことは『敦煌』（原作：井上 靖。1988年）という映画で知ったのですが、これは解読されているのでしょうか？

安井教授：西夏文字は表意文字です。漢字のようなものですね。先に表意文字は余程条件が良くないと全面的な解読には至らないと言いましたが、西夏文字の場合は字典から始まりいろいろな資料が残っています。解読にとっては理想的な条件の下にありました。当初はD型（未知の文字で未知の言葉が書かれているもの）でしたが、急速に研究が進み、言葉はチベット系の言葉で、しかも四川省の木雅語（ムヤゴ）などに近い言葉ではないかとされるに至っています。六千余りあるその文字はほとんど解読され、既に大部の字典が出版されています。あとはこれまでの説の修正と精密化が待たれるところです。現在ではA型（既知の文字で既知の言葉が書かれているもの）とまでは言えませんが、それに近い状況になっているようです。

佐藤久美：A型に近いというお話ですが、そうしますとこの資料のおもしろさはどの様なところにあるのでしょうか？

安井教授：わたしは資料の豊富さだとおもっています。先にみた契丹文字の場合、その主な資料は哀冊（皇帝や皇后の生前の徳をたたえる文）や墓誌銘で、大字と小字をあわせても二十数種しかありません。解読されたとして、言葉の学問の上では得るところは大きいけれども、資料数や分野が限定されているため、歴史や文学など各分野への影響はそれほどでもないでしょう。それに比べ、西夏文字は様々な分野にわたり膨大な資料があります。それらは近年続々と公刊され、更なる解明が待たれているという状況です。

佐藤久美：前回のホープさんの言葉に「解読とは門を開くことであり、解釈とはその向



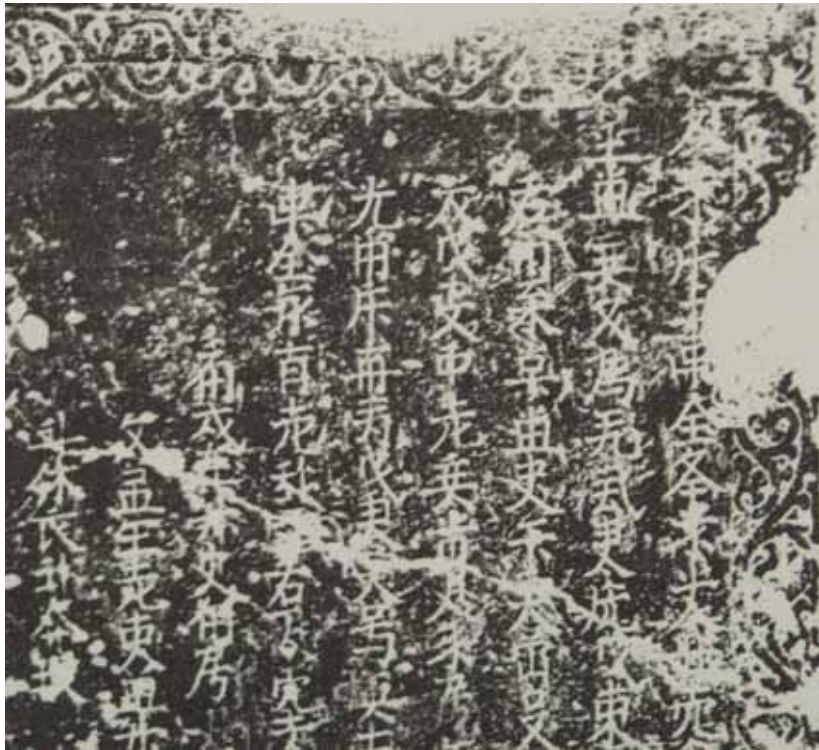
こうにある広がりに関わることなのである」とありましたが、西夏文字資料の場合、門の向こうに沃野が待っているということですね。

安井教授：そういうことです。佐藤さん、ぜひ挑戦してみてください。

### 〈女真文字〉

安井教授：女真文字の資料としては、まず金代の碑文があります。それからずっと時代も下り、明代の『女真館訳語』という翻訳官のための本があります。

これは金代の「女真進士題名碑」という碑文の最初の部分です。



『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編 第四十七冊』

(北京図書館金石組編。中州古籍出版社、1990年出版)による

佐藤久美：先ほど見た契丹大字に似ていますね。

安井教授：そうですね。女真文字の中には契丹大字を基に作ったと思われるものが相当数あります。ですから、女真文字の解読と契丹大字の解読は互いに助け合う関係にあります。

山村健一：そうしますと、女真文字は契丹大字のように表意文字が主体となっているのでしょうか？

安井教授：表意文字と表音文字の混合のようです。

山村健一：日本語の漢字仮名混じり文のようなものなのでしょうか？

安井教授：日本語の場合、漢字と仮名の字形が違ってきます。ですから表意文字と表音文字の区別は一目瞭然です。しかし女真文字の場合、見た目はほとんど変わりませんので、表意文字の部分と表音文字の部分とを区別しながら解読していかなければなりません。

山村健一：そうしますと日本古典の万葉集のようなものですね。すべて漢字で書きますが、意味を表わす部分と漢字音を借りて音を表わす部分があります。

安井教授：万葉集の漢字の使い方にもいろいろあるようです。そこに『万葉集』（鶴久/森山 隆編。桜楓社、1977 年補訂版、1972 年初版発行）がありますので確認してみてください。

.....

山村健一：表意と表音が混合した女真文字の文はこのようなものでしょうか？

下線部が漢字の音を利用した万葉仮名です。表意の部分と表音の部分と同じ漢字で書いています。今の漢字仮名混じり文と比べると随分読みにくいですね。

春野尔      霞多奈毘伎      宇良悲      許能暮影尔      鶯奈久母  
春の野に      霞たなびき      うら悲し      この暮影（夕影）に      鶯なくも

(4290 番)

安井教授：女真文字資料のイメージとしてはそういったものに近いと考えておいていいのでしょうか。

それから、女真文字で書かれた言葉ですが、これは当初からツングース系の言葉（前回末尾の模式図参照）であること後代の満洲語と大差がないことがわかっていました。いまでは『女真文辞典』（金啓琮編著。文物出版社、1984 年発行）などもでており相当に研究が進んでいますが、全面的な解読には至ってないようです。ですから、この文字資料は A 型（既知の文字で既知の言葉が書かれているもの）に近い B 型（未知の文字で既知の言葉が書かれているもの）というところでしょうか。

山村健一：この文字資料のおもしろさはどこにあるのでしょうか？

安井教授：わたし個人としては、金代の資料と明代の資料との間にどのような違いがあるのか、また共通点はどのようなものであるか、というところがおもしろいと考えています。それから清代の満洲語との比較もおもしろいでしょう。

これまでに発見された金代の碑文の数は、十に欠ける程度のわずかなものです。それらは拓本に採られ、印刷資料として流布していますので、それによって研究することが可能です。可能ではあるのですが、恐らく碑文自体が摩滅しているためなのでしょう、私たちが見ることのできる資料はいずれも不鮮明で、取り組みにくいという印象があります。



### 〈パスパ文字〉

安井教授：これはパスパ文字を鑄込んだ元代の貨幣です。中国語の「大元通宝」の音をパスパ文字で綴ったものです。



佐藤久美：パスパ文字は有名です。チンギス汗の孫、フビライ汗の時に作られた元代の文字ですね。中国語の「大元通宝」の音を綴ったということは、漢字を万葉仮名として利用したように、パスパ文字で中国語を書いたということでしょうか？

安井教授：いいえ。これは漢字のような表意文字ではなくて、ローマ字のような表音文字です。ですから、ちょうど、ローマ字で日本語を書くように、パスパ文字で中国語を書いたものです。

この文字は、当初からチベット文字を角ばらせて作った表音文字だということがわかっていました。文字の音もチベット文字から予想することができます。

佐藤久美：そうしますと、C型（既知の文字で未知の言葉が書かれているもの）ということですね？

安井教授：いえいえ。未知の言葉は書かれていません。

パスパ文字は、フビライ汗統治下のいろいろな言葉を書くために作られたものです。これまでにモンゴル語、中国語、トルコ語、チベット語、サンスクリット語を書いたものが発見されています。ですから、A型（既知の文字で既知の言葉が書かれているもの）ということになります。

山村健一：そうしますと、この文字にはどんな面白さがあるのでしょうか？

安井教授：パスパ文字については「解読」というのではなく、読解やら解釈というのがふさわしいわけですが、いろいろなおもしろい面があります。

中国語をパスパ文字で書いた資料があったとします。それに対応する漢字で書かれた中国語資料があれば問題はないのですが、それが無くてパスパ文字だけの場合、いったい何が書いてあるかということが問題になります。パスパ文字中国語を読み解くのはそれほど簡単なことではありません。その資料が置かれた状況を考慮して、どのような漢字があてはまるか、パズルを解

くように読み解くことになります。

山村健一：どうして中国語を書いたときに読解が難しくなるのでしょうか？

安井教授：中国語には同音異字の漢字がたくさんあります。そのうえ、当時は四つの声調がありましたがパスパ文字は声調の区別をしません。ですから、ますます同音異字が増えて読み解くことが困難になります。もっとも、この困難さがおもしろいところで、A型（既知の文字で既知の言葉が書かれているもの）であるにもかかわらず、一種「解説」に似たスリルを味わうことができます。これが一つ目のおもしろさです。

二つ目のおもしろさは、モンゴル語、中国語、トルコ語、チベット語、サンスクリット語など複数の言葉を書き表わしているところでしょう。これは解説ということからは離れるのですが、異なる複数の言葉を書き表わすために、言葉の違いに応じて、いろいろな工夫をしています。その工夫の仕方がなかなかおもしろいのです。言葉と文字の関係を考える上で有益です。

それから、どの様な言葉を書いたか分からないものも幾らかあります。このようなものは解説されるまでの間はC型（既知の文字で未知の言葉が書かれているもの）ということになるのでしょうか。

今日はこのくらいにしておきましょうか。次回は遼・西夏・金・元の創製文字と漢字や漢文との関係を考えてみましょう。

山村健一：ありがとうございました。

それから、先ほどの『万葉集』ですが、次回までお借りしてもよろしいでしょうか？

安井教授：ええ、いいですよ。それではまた来週。

\*\*\*\*\*次回は次のページより\*\*\*\*\*

## 《第4回 漢字と漢字周辺文字》

安井教授：これまで見てきた遼・西夏・金・元の文字は、中国の側からみると周辺に位置する文字ですから、「漢字周辺文字」ということになるわけです。今日はこの漢字周辺文字で書かれた文を解読・研究するさいに、漢字と漢文（書き言葉の中国語）がどのように関わってくるかを考えてみましょう。その場合、二つの事柄にわけて話をすすめると、わかりやすいでしょう。

一つ目は、遼・西夏・金・元の新たな文字を作った人たちが、漢字と漢文からどのような影響を受けたかという点です。

二つ目は、これらの文字で書かれた文を解読・研究する際に、我々はどのように漢字と漢文を利用するかという点です。

まず一つ目からいきましょう。なにか考えはありませんか？

### 〈漢字漢文からの影響〉

佐藤久美：周辺の民族は、長い間にわたって漢字と漢文に触れてきたわけですから、新たに文字を作り、それをを用いるに当たって、いろんな影響を受けたはずです。契丹大字と女真文字は漢字の字形にそっくりですから漢字の影響を受けたことは明らかですね。

それから、字形を四角形にまとめるという点では、契丹大字、契丹小字、西夏文字、女真文字、それからパスパ文字までも漢字の影響を受けているようにみえます。

山村健一：文字自体ではなくて、文字の用い方はどうなのでしょう？

安井教授：契丹文字、西夏文字、女真文字、パスパ文字はみな縦に書きます。これは漢字の文と同じです。直接、間接に漢字の影響を受けているのでしょうか。行（ギョウ）の進み方ですが、契丹文字、西夏文字、女真文字は、漢字と同様に、右から左に進みます。パスパ文字だけが左から右に進むようになっており、これはウイグル文字の文の影響です。

山村健一：いまのお話は、文字と書写の方向についてですが、ぼくはもっと大事なことがあるような気がします。

文字を持たない民族が文字を作るばあい、一番困難なことは、「自前の文字」を使い自分達の言葉をどのように綴って文章に仕上げるかということではないでしょうか。自前の文字を作る前に、何らかの文字を借用して自分達の言葉を書く習慣を持っていたならば問題は少ないはずですが。その場合、借用文字を新しい文字に置き換えて文章を作ればいいわけです。問題は、自分達の言葉を書き表す習慣が無かった場合です。

遼・西夏・金・元ではどうだったのでしょうか？

安井教授：遼・西夏・金の人たちが自前の文字を作る前に何らかの文字を借用して自分達の言葉を書く習慣を持っていた、というようなことを示す資料は見たことがありません。もっとも単語を漢字で音写したものはありますがこれは別で

す。必要な場合は、自分達の言葉を漢文やらチベット文などに翻訳し意思の伝達をしていたのでしょう。

一方の元の支配者であるモンゴル人は、パスパ文字を作り出す前はウイグル文字で自分達の言葉を書いていた。

山村健一：モンゴルの人たちの場合、ウイグル文字モンゴル語のウイグル文字をパスパ文字に置き換えれば済むわけです。そうすれば簡単にパスパ文字モンゴル語の文章を作ることができます。

遼、西夏、金の人たちが自分達の言葉を綴ったことがなかったとします。そして新たに自前の文字を作った。さあ、これから自前の文字で文を綴ろうという際にどうするかということなのです。まず参照するのは「漢字と漢文の関係」ではないでしょうか。

一番簡単なことは、これは少し極端で可能性は低いのですが、漢文の漢字をそのまま自前の文字に置き換えることです。文字は自前の文字で、文の骨組みは中国語という文です。一番難しいことは、自分達の言葉の「書き言葉の形式」を作って、それを自前の文字で書くことではないでしょうか。この一番難しい文の典型が漢字で中国語の「書き言葉」を記した漢文です。おそらく、漢字と漢文のような理想の関係を目指しつつも、実際には「さまざまな段階の文」が作られたのではないのでしょうか。

実は「さまざまな段階の文」というのは、前回お借りした『万葉集』を見て思いついたことです。万葉集にはいろんなパターンの文があることがわかりました。（ ）内は「返り点」です。

(ア) 自 (ニ) 高山 (一) 出来水 石觸 破衣念 妹不 (レ) 相夕者  
たかやまゆ いでくるみづの いはにふれ くだけてぞおもふ いもにあはぬよは  
(2716 番)

(イ) 春野尔 霞多奈毘伎 宇良悲 許能暮影尔 鶯奈久母  
春の野に 霞たなびき うら悲し この暮影 (夕影) に 鶯なくも  
(4290 番)

(ウ) 安麻乃波良 不自能之婆夜麻 己能久礼能 等伎由都利奈波 阿波受  
あまのはら ふじのしばやま このくれの としゆつりなば あはず  
(3355 番)

(ア) の「自 (ニ) 高山 (一)」と「不 (レ) 相」の部分は漢文です。万葉仮名は「衣」と「者」だけです。(イ) は表意文字の漢字と万葉仮名の混合文です。漢文の特徴はありません。(ウ) はすべて万葉仮名です。表意文字はありません。(ア) (イ) (ウ) の順に、次第に万葉仮名つまり表音文字として利用した漢字が増えていきます。

佐藤久美：この例は山村君が言う「自前の文字」を使っているわけではありませんが、

文字表記の初期においてどのようなことが起こるかということについて、いろんなパターンを示しておもしろいですね。

長い間にわたって漢字と漢文に触れ借用してきた人達が、自分達の言葉を書くときにどのような試行錯誤をしたかということを表わしているのでしょう。言葉の環境として同じような条件の下にいた遼や西夏や金の人たちも同じようなことをしたかもしれないと考えると確かに面白いですね。遼や西夏や金の文字資料を解読する際の参考になりそうです。

安井教授：初回に紹介した『アジア古代文字の解読』にこんなことが書いてあります。

「西夏人の祖先はミ族・ミニャク族（弥諾）として八世紀吐蕃時代から歴史に登場した。李徳明の時代まではいわば野生の言葉で民族間の交流通達を行っていた。そして必要に応じて蔵文あるいは漢文を書いていた。その頃、拓拔部、東山部など各地域で独自の方言を話していたと思われる。それらの言葉を総称してタングート語と呼んでおこう。ところが十一世紀に入って李元昊が登場して民族の統一を果たし、西夏国が建設されるに及んで（一〇三二）、その野生の言葉タングート語に新しい衣装を着せ文化言語として成長させようとする動きが起った。まず言葉の整理を行い新しい文字を創作した。その事業には漢人も協力して、文字集や韻書の類も作成した。そこにタングート語を基盤に西夏文字で表記した新しい文章語、西夏語が誕生する。しかし当初は文章語としては未熟で、漢文を置き換えたような単純な文章にしかならなかった。西夏語文献を全体として見たときに、文献ごとに文章が多少相違するように見受けられるのはそのためである。それが次第に推敲されて、・・・略・・・、より複雑な表現ができるようになった。その大きい原動力となったのは中国の古典や仏典の翻訳事業である。」（273-274 頁）

これは西夏語文献についての話ですが、それに止まらず、漢字周辺文字一般について理解する上で非常に重要なことです。解読の対象となる文が、どのような段階にある文であるかを見極める必要があります。たとえ見極めることができないにしても、いつもそのことを気にしながら作業を進めなければいけないということです。

次は二つ目の問題です。創製文字の解読・研究において漢字や漢文をどのように利用するかということでしたね。

### 〈漢字漢文の利用〉

山村健一：初回に、ロシア語と日本語の対照資料を用いて解読のまねごとをしました。

遼・西夏・金・元の文字資料と中国語との対照資料にはどのようなものがあるのでしょうか？

安井教授：二言語の対照資料について話す前に少々確認をしておきたいことがあります。二言語対象資料を「対訳資料」と「対音資料」に分けると便利です。

「対訳資料」というのは文字通り複数の文の内容が対応した資料を指します。初回に見たロシア語と日本語は互いに内容が対応した対訳資料ということになります。これに拠って語の意味や文法を研究することができます。

「対音資料」というのは互いの音に対応した資料です。ロシア語と日本語の対訳資料の中に、「Пётр Иванович」と「ピョートル・イワーノヴィッチ」、「Фёдор Николаевич」と「フョードル・ニコラーエヴィッチ」がありました。これに拠って音を研究することができます。その他に、漢字に対する振り仮名のように、直接に音を注記したものもあります。これも対音資料です。

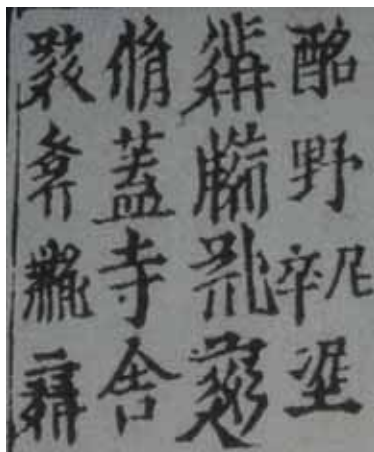
それから、対訳資料ですが、広義と狭義に分けることができます。広義の対訳資料は対音資料を含みます。狭義の対訳資料は対音資料と並び立つものです。わたしはいつも狭義の意味でこの言葉を使っています。それで、対音と対訳を含むものを「対音対訳資料」と呼ぶことにしています。

遼・西夏・金・元の文字資料は、中国語との間に豊富な対訳資料と対音資料を持っています。当時の中国語の意味と発音はほぼわかりますので、これにより、遼・西夏・金・元の文字資料を解説・研究することができるというわけです。

山村健一：そうしますと、中国語の対音対訳資料は漢字周辺文字の解説にとって柱のような存在と言えますね。具体的にはどのようなものがあるのでしょうか？

安井教授：対音対訳資料にはいろいろなタイプのものがあります。その中でおもしろいのが『番漢合時掌中珠』（ハンカンゴウジョウウジュ、1190年）です。これは西夏文字の西夏語と、漢字の中国語が対応した語彙集です。

b B A a



『俄藏黑水城文献⑩』（上海古籍出版社、1999年）による

これは『番漢合時掌中珠』の一部分です。Bは中国語で「寺舎を建てる（修蓋）」と書いてあります。A 西夏語で、Bの中国語と内容が対応していま

す。これは対訳資料といえますね。

おもしろいのは a と b です。a は西夏文字 A の発音を漢字音で注記したものです。b は逆に漢字 B の発音を西夏文字の音で注記したものです。これは対音資料ですね。対音資料にはこのように直接に音を注記したものもあるということは先に話しました。

山村健一：漢字中国語の音と意味さえわかっているならば、これは西夏文字西夏語の解読に威力を発揮しますね。

佐藤久美：漢字中国語の対音対訳資料が、未解読文字の解明に寄与することはよくわかりました。このような資料が中国語自体の研究に寄与する部分はないのでしょうか？

安井教授：もちろんあります。『番漢合時掌中珠』のなかに「𐽄」という西夏文字があり「仏」に相当します。先ほど見たように西夏文字には漢字で発音が振ってあります。その漢字を整理すると「達」と「他」の二種になります。

𐽄「仏」← 達(20丁 b6行)、達(20丁 b10行)、他(36丁 a10行)

山村健一：現代北京語で読みますと、「達」は息の出方が弱い清音の[ta]で、「他」のほうは息の出方が強い清音の[t'a]ですね。この二種は北京語としては全く異なる音になります。

そうしますと、『掌中珠』が作られた 1190 年当時は、現代北京語とは違う状況だったということでしょうか？

安井教授：そこが問題です。すこし込み入った話になりますが、こういったことです。

①「達」の日本漢字音は濁音のダツですね。これからもわかるように、出だしの子音は、隋唐代では濁音の[d-]とするのが主流でした。ところが現代の中国語方言では様々な音となって現れます。なかなかややこしいのです。

北京語など北方方言では、息の出方が弱い清音の[t-]

梅県など客家方言では、息の出方が強い清音の[t'a-]

蘇州など呉方言では、濁音の[d-]

②一方の「他」ですが、隋唐代では息の出方が強い清音の[t'a-]であり、現代の中国語の諸方言でも[t'a-]と現れるのがふつうです。

北京語など北方方言では、息の出方が強い清音の[t'a-]

梅県など客家方言でも、息の出方が強い清音の[t'a-]

蘇州など呉方言でも、息の出方が強い清音の[t'a-]

③それで、『掌中珠』の西夏文字の音注に使われた漢字音はどのようなタイプであったか、ということが問題になります。

山村健一：「他」は時代を遡っても、息の出方が強い清音の[t'a-]であったようですね。

「他」と「達」が一緒に使われていますから、「達」も息の出方が強い清音の [t'-] であつたと思います。

そうしますと、西夏一帯で使われていた中国語は客家方言のタイプだったということでしょうか？

安井教授：「客家方言である」ということではなく、現在の客家語と類似した音特徴を備えている部分もあつたという意味ならば、山村君のように考えるのが一番自然でしょうね。

佐藤久美：当時の中国語の状況がわかるということですが、この音注によって西夏語の状況もわかるわけですね？

安井教授：言うまでもなく、「達」「他」という音注は西夏語音の解明に寄与します。𐵑「仏」の音として「達」と「他」が付されているわけですから、細かい点は別にしても𐵑「仏」の出だしの子音は [t'-] に近似した音であつたと推定できます。この西夏文字の場合 [t'-] に相当するチベット文字の音注が付けられた資料も残っています。ですから𐵑「仏」の音が [t'-] であつたことはほぼ間違いないということになります。

佐藤久美：そうしますと、「達」と「他」は西夏語音の [t'-] を表記する為に付されたということになり、逆に「達」と「他」の漢字音を推定する際の参考にもなりますね。

安井教授：そのとおりです。わたしたちは、独立した「第3の資料」を利用することによって、お互いが支え合う循環の危険を次第に減らしていくことができます。この場合、第3の資料はチベット文字でしたが、必ずしも異なる言葉の資料でなくてもかまいません。「達」と「他」の関係と平行した関係を他の漢字音注の中に見つけ出したり、また西夏側の記述のなかに「第3の資料」と言い得るものを見つけてもいいわけです。いずれにしても、第3の資料を利用し、推定の確実性を高めるといふ方向に研究を導いていくことが肝要です。

\*\*\*\*\*これで終わります。お疲れ様でした\*\*\*\*\*

以上は吉池孝一が担当しました